

秀作

## 建設業を選んだわけ

谷底 満 (29歳)

岸本建設株式会社

土木建設業、土木作業員、この言葉にあまり良いイメージはなかった。テレビをつければ談合、口利き。犯罪がおきれば容疑者の肩書きは「土木作業員」。多分建設業以外の一般人からの建設業に対するイメージと同じようなものしか自分にもなかった。

小学生の時に自宅の風呂場を改装した。毎日毎日暇さえあれば大工、鉄筋屋、左官の仕事を見ていた気がする。その影響で将来になりたい職業は「大工」。中学三年の時までずっと大工になりたかった。物を造る仕事、後に残る仕事、人々に喜ばれる仕事をしたかった。近所の大工の親方に会う度に大工の仕事の話を聞いて目を輝やかせていた。そんな時に衛星写真を見る機会があり中国の万里の長城が見えた。これはすごい。他の建造物は全く見えないのに万里の長城だけははっきりと写っている。これをきっかけに大工から土木の方面に将来の夢がかわり、地図に残したい、例えば米粒くらいでもいいから地図に残るようなモノを造る仕事に携わりたいと思い土木建設業界に就職することに決めました。

漠然としたイメージの中、現場職員の仕事が始まったが、一体何をしていたのやら分からない。土工でもなく大工でもなくオペレータでもない職員という仕事。測量をして位置を出しても測量屋でもない。一年目の時は道具の名前すら分からずに周りの人の会話にすら入ることも出来ない。そんな時にオベの人が「あそこの形はどんな風になるのかな？手があいたら丁張り出してくれへんかな」と僕に言ってきた。急いで事務所に戻り計算をし測量して出した丁張り、それをオベの人は見

て「ああここはこんな感じになるんかあ」と言い仕事を続けてくれた。終ってみるとその通りに法面が出来上がっている。職員は段取屋なのだとこの時気付いた。現場の仕事がスムーズに進むように段取りをし、作業員さんに作業をしてもらう。そのために打合わせをして、一日先、一週間先、一ヶ月先まで考えて材料や重機、人員の確保に至るまで段取りを行う、これが職員の仕事だ。

以前上司に「段取り八分」という言葉を言われたことがあった。全体の仕事を十と考えると、その中の段取りの占める割合が八分にまで及ぶということらしい。遂に八分を占める段取りがしっかり出来ていれば後は放っておいても仕事は上手く進むらしい。これを実感したのが地下鉄の現場に行った時だった。各職種十人ずつ位、総勢五十人程が作業をしている現場だったが狭い場所での作業だったため、材料の搬入、重機の配置などに注意を払わなければならなかった。打合せ不足で材料を搬入してしまったり邪魔になるし、作業も止まる。生コン打設準備の時に必要な道具を揃えておくことや、型枠内の清掃をしておくこと、それらが出来ていなければ打設当日の朝からバタバタして出来ていないことをやらなければならない、打設開始時刻が遅れてしまい作業終了も遅くなってしまふ。そして言われるのは「段取り悪いなあ」。何度か言われたがその度に改善をし次回に繋げるようにする。完璧とはいかないが自分の考えていた通りの時間、自分が考えていた通りの配置人員でスムーズに仕事が進んだ時は、この仕事のやりがいと喜びを感じることが出来た。こ

これから僕は様々な工種の現場で働くことになるだろうが、工事がスムーズに進み、作業が止まらないように段取り出来るような職員になりたいと思う。

今、この仕事に就いて四年目だが、三年目までは毎日がハブニングだった気がする。「三年辛抱しろ」と一年目の時に言われたが、その通りだと今なら思える。仕事を始めた頃は、「何でこんなことせなアカンのやろ？」とか逃げ出したくなることも多々あったが、三年目くらいから工事の流れが少しずつ見え始め、やらなければいけないことを含む段取りも分かり始めたような気がする。どんな辛いことがあっても地図に残るモノを造り、何年か後には地図に載ることを夢見て頑張ろうと思っていた一年目の想いと、「三年辛抱せい」という言葉のおかげで今の自分があるのだと思う。

今後はもっと広い視野をもって仕事をしていこうと思う。人間一つのことを見ると他のことはなかなか見えないもので、気付いた時には遅かったなんてこともあるだろうが、僕は広く物事を見て、深く考え、余裕をもって仕事が出来、作業員の人に不安を与えないような職員、頼りにされる職員になり、これからも沢山地図上に自分が手掛けたモノが残っていつてくれるようにこの仕事を続けていこうと思います。

